■日　時：２０２０年2月１６日（日）
■場　所：立川教会
■説教題：「わたしの父は今もなお働いておられる。」
■説　教：飯島　信
■聖　書：旧約 ヨブ記 23：1－10（旧 p805）
　　新約 ヨハネによる福音書 5：1－18（新 p171）
■讃美歌：165「心をつくして」404「あまつましみず」

お早うございます。
先週は、立川教会 69 周年の記念礼拝でした。
来年 70 周年を迎えるにあたって、先週に起きた二つのことをお話しします。私たちの教会が問われていることです。
今日の説教題は、「わたしの父は今もなお働いておられる」です。思えば、神様は、これまでもずっと私たちと共に働いて下さいました。そして、今も私たちと共に働いておられます。その神様が、二つの出来事を通して、私たちに新たな問いを投げかけられました。

まず一つ目です。
ご承知のように、水曜日には、午前と夜と二つの祈祷会があります。午前はルカによる福音書を読み、夜は箴言を読んで皆さんで語り合い、祈ります。祈りは、週報に記載されている方々をそれぞれが分担して祈ります。但し、午前の祈祷会は、これまでのレギュラーメンバーの方々が参加出来なくなり、私一人で聖書を読み、祈っています。もともと、夜に参加出来ない人のために、新しく設けた午前の祈祷会なので、メンバーが復帰するまで、午前はしばらく休みにしても良いかなと考えていました。しかし、ホームページにもリーフレットにも記載されている集まりなので、やはりこの 3 月までは続けようと思い、一人でも行うことにしたのです。
そして、先週の水曜日のことです。いつもどおり午前 10 時に集会室で黙祷をもって始め、讃美歌を歌い、聖書箇所を読み、一人ずつの名を挙げて祈りました。祈り終え、牧師室に戻ろうとした時です。玄関のチャイムが鳴る音が聞こえました。戸を開けると、車で来た男性とその母親、それにあと一人、男の方が立っていました。「祈祷会はありますか？」と聞かれたので、「午前の祈祷会は終わりましたが、祈りに来られたのですか？」と聞き返しました。すると「そうです」と言うので、集会室にお招きし、それぞれ自己紹介をして 4 人で祈りました。母親と息子さんは韓国の方で、もう一人の男性は日本の方でした。それぞれの国の言葉で祈り終えた後の語らいを通して、次のことが分かりました。
女性は、韓国のバプテスト教会の宣教師でした。30 年前に来日し、M 市の S 教会で宣教師として働いているとのことでした。私も出身はバプテストなので、バプテストで使っている『新生讃美歌』のことや作曲者のことなど共通の話題もあり、確かにバプテスト連盟との関わりはあるようでした。
ところで、立川教会を訪れた目的です。それは、80 才になっているその宣教師ですが、

つい最近、本国からの宣教支援が無くなり、教会運営に困り、キムチを売って運営資金に回している。立川教会でもバザーや何かの催しの時に、キムチを売っても良いかどうかを聞きにきたことが分かりました。

私は、「事情は分かりました。それでは、役員会に諮ってみましょう」と答え、何か教会の資料を送って欲しいと頼みました。帰りがけに、献金する用意はして来なかったので、代わりにキムチを置いて行きますと言って、息子さんが販売用のキムチを置いて行ったのです。私は、それでは申し訳ないと思い、「キムチ献金です」と言って、1000 円を渡しました。すると息子さんは、「それならカクテキも置いて行きます」と言って、カクテキも置いて行ってくれました。キムチとカクテキは夜の聖研・祈祷会に来られた方で分け合いましたが、匂いが強いので、電車で帰る細川先生は持って帰れず、K さんと私とで分けました。

ところで、この出来事を通し、神様から問われたことです。

日本に来日してから 30 年間、異国の言葉を学び、日本で伝道活動をした一人の高齢の韓国人が、宣教資金が途絶え、生活に困り、キムチとカクテキを売って宣教資金を得ようとしている。そのことをどのように受け止めるのかと言うことです。一昨日息子さんが届けてくれたチラシでは、日本人の女性牧師が牧会し、そろばん教室の 2 階に教会があるようでした。

いずれにしても、もう少しじっくりとこの教会のことを知り、又牧師と宣教師のことも知った上で、今回のこの出来事の意味を考えたいと思っています。

第二の事です。

先週と今週の 2 回、私は夜間の東京バプテスト神学校で、「他教派から見たバプテスト」と題する講義を行って来ました。カトリックは全世界で一つにまとまっているのに対して、プロテスタントは大きな教派から小さな教派まで数えることが難しいくらいに沢山に分かれています。因みに、その中でも教会や教会員の数が最も多いのは私たちが属している日本基督教団です。2 番目は日本聖公会、3 番目は日本バプテスト連盟です。

ところで、先週神学校で、A4・5 頁ほどの資料をいただきました。2019 年度のバプテスト連盟の神学校デーの主題講演で、N 教会の M 牧師の話しが載っているものでした。私は、いただいた週は目を通さずにいたのですが、一昨日、2 回目の講義の前に読んでみました。そして驚きました、彼の実践にです。

とても長いので、ところどころ説明を加えながら拾い読みをします。

「みなさん、こんにちは、N から来ました。11 年前に会堂建築をしました。当時 N 教会は、年金生活の方々で、子どもがいない状況でした。大きなお金をかけて会堂建築をしたが、よう考えたら、使うのは週にたった 1 回だけ。礼拝堂もそうだし、平日は利用しない。どうしたら毎日利用されるか。毎日人が来て、毎日福音に、神の言葉に触れる方法はないか（と考えていました）。その時にちょうど、忘れられない（新聞）記事がありました。シングルマザーの方、4 歳と 2 歳、彼氏に会いたいから子どもたちを家において、1 ヵ月帰らなかった。もちろん、2 人とも死んでいます。もっと衝撃的なのが、その子どもたちが最後に食べ

た胃の内容物。マヨネーズとダンボール。この子たちは、神様の作品であり、神が命を与えたのに、最後にどう思ったんだろうか、人生をどう考えたのか、と思いました。」

M 牧師は、この事件を機に、自分は教会で「愛だ、愛だといいながら、全然手を差し伸べていない。子育てに困った方にも手を差し伸べていないと言う悔いがあって、附属幼稚園を開設」するのです。この時、幼稚園を教会でやりたいと教会員に言うと、全員反対。「そんなん、先生、できへん。公立幼稚園が統廃合している。そんなん、やったって無理、すぐ終わる」と言われ、教会に来ていた公立幼稚園の教師 2 人を最後の頼りにして自分の願いを切り出します。しかし彼らも又「先生、できへん、絶対できへん」と断ります。しかし、その中の一人が友人の公立幼稚園教師を紹介してくれ、初対面で、キリスト者でもないその人が、「先生の夢を背負わせていただきます」と言ってくれたのです。

こうして始めた幼稚園でしたが、この幼稚園は、どのような障がいがある子でも受け容れるのです。ダウン症、発達障がい、言語が発せられず、公立幼稚園を退園させられた子など、既成の幼稚園に適応できない全ての子どもに扉を開いたのです。

彼の実践は、そこで終わりませんでした。それは、保護者で助産師との出会いでした。彼女からの問いです。
「先生、1 年間で、日本で人工中絶している子どもたちは何人いると思いますか？」
「何人ですか？」「20 万人です。」
彼は 2017 年、「こうのとりのゆりかご」の医師と保健所で講演した時に聞きます。その医師は、中絶（で使われた）薬の量を考えるとその 3 倍と答えました。
さらに 2019 年 4 月、他の医師が「100 万を超えていると私が言っても誰も反論しないだろう」との言葉を聞くのです。

助産師は、彼に問います。
「先生、（このような現実の中で先生は）どうするんですか？」
「えっ？僕はどう答えたらいいんですか？その子を僕がもらいます、と言ったらいいんですか？」
「はい。」
「分かりました。（それなら）あなたが勤めている産婦人科のドクター僕を紹介して下さい。」

こうして、彼は、紹介された産婦人科のドクターを説得し、協力産婦人科になってもらい、彼と二人、N 県で唯一、特別養子縁組の出来る認可を県から受けるのです。つまり、出生前診断で、障がいのある子が生まれる可能性があると分かり、中絶を希望する親に中絶を思い止まらせ、生まれて来た子どもに、もし障がいがあり、親が引き取るのを拒否した時に、そ

の子を彼が引き取り、責任をもって養子縁組を実現する働きをするのです。
　例えば、出生前診断で、ダウン症があり、心臓の左心室に奇形があり、50%の血液が逆流して穴が空いている子です。母親は出産を恐れていました。彼はこの母親を励まし、生まれて来たその子に手術を受けさせ、自分と養子縁組をしたのです。
　この子の親は彼に聞いたそうです。
　「これほどの障がいを持った子が、（養子縁組をした結果）兄弟となったら、先生の娘さんや息子さんは結婚する時に不利になりませんか」と。その話を知った彼の長女は答えたそうです。「そういう人とは結婚しません」と。

　ここまでで、この牧師の話しの紹介は終えますが、やはり驚きました。こんな人がいるのかと。そして、考えるのです。
　神様が今なお働かれているとは、神様は、今なお私たちの心の扉を叩き続けていると。
　もうこれ以上無理だと思う私たちの心の扉を、「本当にそれで良いのか」と。「まだまだ出来ることがあるのではないか」と。

　先週の水曜日に起きた出来事、そして金曜日に読んだ講演記録・・・。この二つは、私たちの教会の働きを共に問うていると思うのです。
　前者は、S 教会でなくても良いのです。本当に私たちの力を必要としている伝道の現場があれば、どんなにささやかであっても、私たちは惜しむことなくその力を用いさせていただければと思うのです。金銭だけではなく、技術であっても、知識であっても良いのです。
神を愛し、人を愛する。それは、神に仕え、人に仕えることです。

　この 1 年、なお一つ、仕える業を己の内に見出し、それを神様の用いていただくことを祈ります。
　祈りましょう。